

ベリスキーにおける「個の自由」について

佐々木 弘明*

The consideration of "the freedom of individual"
in V. G. Belinskii

Hiroaki SASAKI

I

18世紀後半以降に貴族を中心としたロシアの知識人たちは、専制主義と農奴制の下にあって先進西欧諸国からとり残されているロシアの現実を批判的な目で直視し、その矛盾を指摘し、その改革を求めていった。デカブリストの乱（1825年）は革命によって新しいロシアを求めようとする目覚めた急進的貴族たちの反乱であった。ア・イ・ゲルツェン（1812—1870）は少年時代にデカブリストたちの処刑に遭遇しその意志を継承することを誓ったといわれる。

1830年代以降には大学サークルを中心に哲学や政治問題・社会問題に関心を持つ若い貴族たちそして急速にその数を増していった雑階級人と呼ばれる非貴族出身の知識人が人間の自由と社会正義を論じ、自らを国民の知性としての自負のもとに、批判的態度、反対制的言動と民衆啓蒙にその身を捧げていき、やがてインテリゲンツィアと呼ばれるロシア独特の社会層が形成されていく。彼らは体制外にあり、専制政府から無視されるか迫害されたのは当然であるが、同時に、意識や思想では国民大衆・農民の側に立ちそのために身を捧げながら彼らとは文化的に深い断層があり、彼らと直接に交わりその要求や意志の代弁者とはなりえなかったため、彼らからも切り離されていた。

インテリゲンツィアは「ロシア社会の断層の中に生き」「上と下との断層において、彼らは疎外され」ていた。この断層のなかでインテリゲンツィアは社会的には孤立していたが、自らは「野蛮な権力社会に優越する、遅れた大衆とは異なる」¹⁾という「優越と相違」の意識が、彼らの間での見解や思想には違いがあり、時には激論を交しても、互いを結びつけていた。彼らは「呪われたロシアの現実」に「人間性と理性の光明をさしいれ」²⁾ることを自らの使命としたが、観念論者から唯物論者に至るまで、現実社会の断層の中にあつたため、観念の世界で苦悩を続け、人間のあるべき姿をいわば原理的に追い求めていったために、その主張は形而上的で、理想主義的、倫理的・道徳主義的な世界から脱することは出来なかった。1870年代以降に革命運動がより活発化していくが、その先頭に常にインテリゲンツィアがあり、その思想も行動も時代によって変貌を遂げていった。

* Dept. of Education

ヴィッサリオ・グリゴリーエヴィチ・ベリンスキー (1811—1848) は、革命的民主主義者の父と呼ばれ、1830—40年代を代表するインテリゲンツィアであった。ヴェ・イ・レーニンが彼を「わが国の解放運動において、貴族に完全に取って代った雑階級人の先駆者」³⁾と呼んだが、その生まれは、医師の息子で、雑階級人であった。彼はシェリング、フィヒテの観念論から出発しながら、ヘーゲルを経てフォイエルバッハに到り唯物論的世界観に達し、時代の最先端の世界観を他に先んじて身につけたことが革命的民主主義者の父と評されるゆえんであるが、彼の短い生涯は極限までの思想的苦悩の連続であった。

インテリゲンツィアにとって思想は生活であったが、貴族のインテリゲンツィアにはそれ以外にも生活があり、思想のために思想を求めたが、雑階級人のインテリゲンツィアには「文字どおり思想以外の生活はありえず」「インテリゲンツィアとしての仕事で働く以外に道がなかった」⁴⁾のであり、思想は生活のすべてであり、生きる手段であった。ベリンスキーの思想的苦闘は、作家・批評家の職業として生き、自立していく過程で生み出されたもので、「凶暴のヴィッサリオン」と呼ばれるほどの気性の激しさともあいまって、常に自分の論理の一貫性、主張の正当性を求め、自らを思想的に高めることに心血を注いだ。それが最終的に彼を思想的に先鋭化させていった。彼は先進的思想家として革命を肯定したが、ゲルツェンやエム・ア・バクーニン (1814—1876) などの貴族のように現実のロシアに、まして農民をはじめとする国民大衆の中に革命の可能性を夢見ることはできず、国民大衆の無知、迷信深さや残忍さを現実として冷静に見つめ、その彼らを理想化することを非難した。革命の必要は認めても、それよりも現実に必要なのは国民大衆の啓蒙であり、彼ら意識を知的・道徳的に高め市民的自覚を培うことであるとした。それは「ロシアは自己の救済を……文明、教育、ヒューマニティの進歩のなかに見ている」⁵⁾というエヌ・ヴェ・ゴーゴリ宛て書簡 (1847年7月15日付け) の言葉に端的にも見られる。

ベリンスキーは1841年にヘーゲル主義から脱却し社会主義の理念に達するが、友人ヴェ・ペ・ボトキンに宛てて「私は苦勞と心痛を重ねて古い理念と訣別し、それをとことんまで否定し、改宗者の狂態を尽くして新しい理念に移っています。かくして今や私は新しい極端にあります——これは社会主義の理念です。それは私にとって理念のなかの理念、存在のなかの存在、問題のなかの問題、信仰と知識のアルファでありオメガとなりました。社会主義の理念は私にとっては歴史も宗教も哲学を飲み込んでしまったのです。」と書き送っている。しかし彼は、社会主義の理念を倫理的に捉えていた。何よりもそこに彼は個人の人格の解放の場を見いだしたのであった。続けて彼は「それ故に私はこれによって私の生、あなたの生そして私が生の道で出会うすべての人の生を解明するのです。」と書いている。彼の思想的苦悩は個人の人格の解放どこにどのように求めればいいのかということでもあった⁶⁾。彼はフィヒテの観念論の中にあって内的な「自己の個人的完成」⁷⁾に求め、ヘーゲリアンとしては「現実との和解」により専制主義と農奴制の現実をも「理性的現実」とみなし「皇帝権への絶対的服従」のなか求めた⁸⁾。社会主義の理念は、彼に個人の解放のまだ見ぬ希望の世界への道を開くものであって、この未来に社会と文化の発展と人間一人ひとりの幸福への道を見いだし得ると確信した。しかしその実現への具体的な手段と方法を彼は啓蒙・民衆教化以外にはもっていない。したがって彼も理想主義者であ

ったことに変わりはない。ゲ・ヴェ・プレハーノフは、ベリスキーは「ヘーゲルの絶対的哲学に反逆したのち……完全に被抑圧者たちの側に移った。しかし被抑圧者とは、彼にとって特定の社会的生産関係の下で生活する生産者ではなく、人間一般であり、抑圧された人間個人と思われた。」⁹⁾と、ベリスキーが抑圧されている国民大衆を「人間一般」「人間個人」と抽象的に捉えていることに不満を示しているが、ベリスキーにとって何よりも個々の人間の人格的解放が先決であり、そのため社会主義の理念によって現実に「いとうべきロシア」との闘いに入ったが、その理念をあくまで倫理的、人格主義的に解釈していた。彼にとって階級闘争の発想はない、彼の眼前には貧困や不正で苦しむ農民が具体的にいるわけではない。彼はインテリゲンツィアであり、依って立つ階層はない、そこには抑圧者と被抑圧者があるだけで、それは必ずしも階層ではなく、それは正義と不正義といった倫理的な区別にすぎず、従って彼の人間の解放は抽象的にしろ一人一人のすべての人間の解放から始まらざるをえない。

社会の不正義は人間の人格的解放によって正されると彼は信じる。ベリスキーはポトキンに宛てて、「私にとって今や、人間の人格的個（チェロヴェーチェスカヤ・リーチノスチ）は、歴史よりも社会よりも、人類よりも、はるかに高きにある。これこそが世紀の思想であり、配慮なのだ！」（1840年10月4日）¹⁰⁾とまた「人間の人格的個（傍点筆者）の自由と独立は、正義と勇敢さの上に基づいた社会においてのみ可能なのだ」（1841年6月21日）¹¹⁾と書き送っている。さらに晩年の書簡では、「たしかにヴォルテールは、時に民衆を vile populace（賤民）と呼んだ。しかしそれは民衆が無学であり、迷信的であり、狂信的であり、残忍であり、拷問と体刑を好むからである。因みに私の信心深い友人〔註：バクーニンを指す〕とわがスラヴ派たちは、私をしきりに民衆に対する神秘的信仰に引き入れようとした。一体どこで、いつ、民衆は自己を解放したというのか？ 常にすべては人格的個（リーチノスチ 傍点筆者）を介して成就されるのだ」（1848年2月15日）¹²⁾と書いている。このようにベリスキーは「人格的個」（リーチノスチ）という言葉を使っている。このリーチノスチという言葉は「個人」とか「個性」という意味でもあり、英語の individual（ロシア語でインディヴィードとかインディヴィドゥールとかインディヴィードゥム）とともに用いられている。この言葉をインテリゲンツィアたちが、西欧派もスラヴ派も、好んで使い、両者の使い分けは必ずしも明確には行われてはいないが、意識的に用いる場合には、単なる個人（インディヴィード）に対置して、道徳的な意味を込められていると思われるので、その場合は「人格的個」と訳するのが適切であろう。上記のようにベリスキーは明らかにリーチノスチを意識的に用いており、それをより明確に重みをつけるために「人間的」という言葉をかぶせている。「人格的個」の確立こそが彼の求めた人間像にほかならず、「人格的個」を確立することによって個人の解放がなされるのである。

それでは「人格的個」の内実はなにか、彼は、彼の創作の頂点である『プーシキン論』（第8論文1844年）の中で次のように述べる。

「真の道徳性の最も崇高かつ最も神聖なる原理の一つは、誰であれ区別なく人間がまず人間であるという理由により、ついで彼が有する限りの人格的個としての価値ゆえに、あ

らゆる人間のうちに認められる人間的尊厳に対する宗教的尊敬心のうちにあり、『人間』と呼ばれるすべての人々の自己の兄弟的結合の生き生きした、共感的な自覚のうちにある。これこそが、『道徳的人間』という言葉でわれわれが理解するところのものなのである。』¹³⁾

このような「道徳的人間」たることが「人格的個」の意味するところであり、それが形容詞「人間的」をあえて冠するゆえんでもある。

ベリンスキーにとって「人間的人格的個」は社会的存在としての人間であり、あるべき社会を求め得る自由な人間であり、利己を棄て積極的に社会的福祉に奉仕する人間であり、彼はそのあるべき社会へ導く思想として社会主義の理念に到達した。彼の思想的苦悩はここに到達する過程であったといえよう。個人の解放、これが彼のモチーフであった。以下その軌跡を彼の人間観および教育観を中心に追っていく。

II

ベリンスキーの最初の論文といわれるのが、モスクワ大学の一年の時に書いた『良き教育は青年にとって最も必要である』(1829年)である(レポートだったともいわれる)。この論文は、「われわれは、道徳的側面から人間を考察するとき、人間というものが理性的なものとしてではなく、ただ理性的たるべきものとして生まれてくること、そしてこのようなものになるためには、人間に持続的な経験が必要であることを見る。」という文章で始まり、「よき教育」の必要性を説いたもので、その論調は教育環境説を説く啓蒙主義的教育観の域を出てはいず、彼の独自の見解とは言えない。しかし彼の視点が「道徳側面」から人間を考察していることに注目すべきである。彼の主張はこうである。「しばしば最も善良な彼の行為が悪しきものとして受け取られ、善を為そうとする願望が危害を加えようとする意図と受け取られる」ことがあるが、これは「すべて教育の不足から」起こることである。しかしそれは「単に世俗的な礼儀のくだらない知識」ではなく、「知能の啓発、心情の陶冶、およびこれと結びついた対応の洗練さ」をもたらす「真によき教育」でなければならない。人間は、「無学な、偏見に目のくらんだ人々、粗野な、教養の無い人々」と「教養や、行為における高潔さや、対応における洗練や、やさしさや、善良さ」を持った人々を区別するのが「道徳教育」の成果である。「教育は人間第一の幸福であり、第一の必須事である。人間の全生涯の運命はこれに係っている。人は教育次第で有徳なソクラテスにもなれば、墮落したネロにもなりうる」のである。例えば、古代ギリシャ人がペルシャを征服したのは、「一人一人のギリシャ人が早くも幼年時代から高貴な、気高い印象に養われ」「ごく若い青年の時代から自由を呼吸とし、祖国愛を魂とし、栄光を思念した」からであり、一方ペルシャ人は「ごく若いときから奴隷根性と卑屈な感情を教え込まれ、それは本性そのものと化して」その「特異な性格を形づくっていた」ために破れる運命であったのである、と説く¹⁴⁾。ベリンスキーは、「良き教育」によって「自由で」「有徳な」人間の形成こそが人間そして社会の幸福の源泉であるとしたのである。

ところでこの論文でベリンスキーは「高貴な、気高い印象」という言葉を用いているが、それは同じ頃弟のイヴァノフに宛てた手紙にも見られる。「それらが(註：ジュコフ

スキー作品)が君の知力と心と想像力の糧となること、あらゆる気高いもの、あらゆる優美なものが教養ある人間の魂にのみ与えるような清い、至上の喜びを、気高く、高貴な印象をそれらが君に与えることを望みます！ 自分の蔵書を増やしたまえ、……自分の理性を啓発し、心を教化するために、偉大な天才の創造的作品によって自分の魂を高めるためにです。もう一度繰り返します。——すべての高貴なものに魅了されなさい、すべての優美なものを愛しなさい！」¹⁵⁾とすぐれた文学作品を通して自らを高めるように勧めている。この当時ベリスキーは、とりわけ「高貴なもの(ブラゴローツトヴォ)」に特別な意味をこめている。「高貴なもの」を身につけることが「有徳な」人間への道であり、それがあつかないかで人間の価値を判断している。このことをその主題として書かれているのが戯曲『ドミートリ・カリーニン』(1830)であった。

この戯曲は最初大学の文学サークル仲間に発表し、その後出版を試みたが、農奴問題に触れていることもあって大学当局の許可を得られなかったいわくつきの作品である。そのあらすじは単純で内容もロマンチズムに満ちたものであった。孤児となった農奴の主人公ドミートリが主人に引き取られ、解放農奴となり、その息子たちとわけ隔てない教育を受け、彼は学問に励み高貴なものを身につける。やがて他家へ養女にでていた娘ソフィアと恋に落ちる。ソフィアも聡明で、正義感の強い気高い女性である。しかしその母親と息子たちはドミートリを農奴として扱い、その結婚を認めず、主人の死後ドミートリを再び農奴に落とす。母親はソフィアに軽薄な公爵との結婚を進めようとするが彼女は拒み続ける。兄のアンドレイが奴隷のくせに妹を抱くとは、との言葉に激怒したドミートリは彼を銃で打ち殺し、獄舎につながれる。絶望のなかにいるソフィアは、脱獄してきたドミートリに天国での幸せを求め、それに応じたドミートリは短剣で彼女の胸を突き刺し、自分も後を追おうとしたときに、手紙が届き実は彼は主人の実の子で、ソフィアは異母妹であることを知らせる、かくも不幸な己れの運命を呪って彼は彼女の後を追う。

この作品は、文学的価値としては高いものではないが、ドミートリに「もしぼくの面前で弱者に対する強者の不正、圧迫、残忍な行為が語られると、ぼくの胸のなかで地獄が反乱するのだ」、「奴隷であること！ おお——それは毎秒死ぬこと、何千という死を死ぬことを意味しはしないだろうか？」¹⁷⁾、「——誰がこの有害な権利——一方の人間が他の彼らと同じような人間の意志を自分の権力に隷属せしめ彼らのところから神聖な財宝—自由—を奪いとる権利を与えたのか？ 主人は慰みや気晴らしに自分の奴隷の皮を剥ぎとることが出来る、家畜のようにこれを売ったり、犬や馬や牛と交換したり、一生その父や母や姉妹兄弟、その愛するかけがえのないすべての者と別れ別れにさせることが出来るのだ！」¹⁸⁾、「おお、汝の地獄の響きは墓にまでついてまわるのか！ 恥ずべき奴隷制のシンボルよ、目の前から消え去れ！ 僕の手を苦しめるな、僕の手を凌るな！ 自由なるものとして僕は生まれてきた、自由なる者として死ぬのだ！」¹⁹⁾と、叫ばせ、ロシアの農奴制社会の現実を鋭く非難したものとして評価されている。

しかしこの時期ベリスキーは、ロシアの専制主義と農奴制下のロシアの社会構造そのものの非難には到ってはいない。彼は、人間の自由と権利の問題を提起したのであり、しかもそれは人間の価値は、身分や富によって決められるべきではなく、「高貴なもの」を身

につけているかどうか、つまりは「よい教育」受けているかどうかによって判断されなければならないという道徳的観点からの主張であった。

彼は、ドミートリを「僕はいつも勉強に励んでいた。それが典型的な怠け者であった小悪党ども（註：主人の息子たち）の大きな憎しみをかうものとなった。……僕の恩人には膨大な蔵書があったので、読書は早くから僕の最も好きな仕事となった。読書は僕の趣味を形づくり、外に現われ始めていた憤怒に養分を与えながら、僕に高貴な方向を与えてくれた。詩歌の精神に培われて、僕の魂は読書によってなにか名状しがたい勇気が出た。僕の魂にはあらゆる気高いもの、高貴なものへの愛が目覚めていった。」²⁰⁾ ことによって身分を超えて愛することを始め、人間としての自由と権利を有する価値ある人間として描いており、またその恋人ソフィアも貴族の娘でありながら、「高い額に知力と高貴の印し」を持ち、「あらゆる気高いもの、理想的なものへの愛と、あらゆる平凡なもの、俗なものへの憎悪と誇らかな軽蔑」を抱き、「出生の、祖先の権利は人類にとって恥ずかしい偏見以外のなにものでもない、唯一つ人間的価値だけが尊敬と名誉の権利を与えなければならない」²¹⁾ と主張するあるべき女性そして人間として描かれている。

それに対して、母親やそのまわりの貴族たちを自分の身分におごり、いつも名誉や富みを追いかけ、無知で教育を蔑視する低俗な人間として描き、彼らに「貴族が、これらの学校で学んでいいものなのでしょうか？ 雑階級人、神学校生徒、町人、解放農民、あらゆる種類の屑どもそして下賤な奴らで満ち溢れている学校へ。」「学問をして何になりますかね？ わたしたちも父親たちも学問はしなかったが、いつもパンには有りつめた。お陰で、暮らしたって学問する者たちよりも悪くはないし、それどころから、食事に呼んでくれてわたしたちに頭を下げる学者とかいう輩もいる始末だ。」²²⁾ とその無学ぶりと低俗ぶりを言わしめている。

「高貴（ブラゴロートヴォ）」は、「家柄の良さ」を表わし貴族を表わす言葉でもあるが、雑階級人たるベリンスキーはそれを意識して用いているのではないか。つまり本来人間としても「高貴」であるべき貴族が実は墮落し、無学で低俗化していることへの皮肉であったのではないか。「高貴であること」は「良い教育」「学問」によるものであり、従って身分にかかわらずどんな人間でも「高貴となること」はでき、誰しもが「高貴」になれば必然的に社会悪はなくなり、自由も権利も実現されることになる。

しかしベリンスキーは、「高貴になること」そしてそのための「良い教育」を個人の努力と自覚に求める。従って当然ながら、どうしたら良い教育環境をすべての人間に保証するかという問題は彼の関心にはない。彼の関心は人間の内面へと向かっていく。

ベリンスキーは、エヌ・ヴェ・スタンケーヴィチのサークルにあって、シェリング哲学の影響を受けていた。このサークルにはバグクーニン、ポトキン、カ・エス・アクサーコフなどがいたが、とりわけバグクーニンはフィヒテそしてヘーゲルを紹介してベリンスキーの思想形成上大きな役割を果たしていく。ベリンスキーは1832年には放校となり、文筆家の道を歩み始めるが、その最初の大作が『文学的空想』（1834年）であった。

「無限にして絶妙な神の全世界は、無数の形態において出現する唯一にして永遠のイデー（唯一永久の神の観念）の息吹以外の何物でもなく、無限の多様性における絶対的統一

の偉大な光景にほかならない。……自然の力は相い闘い、敵対しそして媒介的諸力によって和解し、調和がこの永遠の醸酵のなかで、本質と物質との闘争のなかで支配している。つまりイデーは生きていたのである。我々は自分の弱き目でそれをはっきり見る。イデーは賢明である。なぜなら、すべてを予見し、すべての均衡を保っているからである。……神は人間を創造し、彼に知性と愛情を与えた。従って、人間は自分の知性と知識でこのイデーを理解し、生き生きとした熱烈な共鳴のなかにイデーの生に触れ、無限に創造を続ける愛の感情のなかで、イデーの生を分かち合うのだ！²³⁾

このようにベリンスキーは、人間は神の「唯一にして永遠のイデー」の生を理解しそれを表現しなければならないとする。だがその生は「現実」あるのであり、「現実は闘争」である。この現実の闘争において「愛の感情にある自我」を棄てなければならない。彼は言う、「自己を棄てよ、自己のエゴイズムを圧殺せよ。……隣人、祖国の幸福のために、人類の利益のために、すべてを犠牲にせよ、報いをうるためにではなく、真理と幸福のために、真理と幸福を愛せよ、重い十字架を担って神との合一、不死をえよ、それは汝の自我の根絶のなかで、この限りなき至福の感情のなかで、なされねばならぬのだ！²⁴⁾そしてさらに「ここに永遠のイデーの精神的生がある。その表れは一善と悪、愛と利己心との間の闘争である、肉体的生における圧縮される力と膨張される力の闘争と同じように。」²⁵⁾と。つまりは、自我そして利己心を棄て、「理知の道と愛情の道」とを結合させ、ひたすら善を為すことにその身を奉じることが人間の生きる道である。

どうすればそうできるか。ベリンスキーはそれが詩や文学の芸術の役割である、それが神と人間とをつなぐ媒介者であるとする。かれは、芸術は「その無限に多様な顕現における宇宙の偉大な理念の表現」であり、「美の悦楽は、われわれの自我を一時的に忘却し、自然の一般的生き生きした共感を以て生きることにある。もしも詩人の作品が高揚された精神と熱烈な感情の成果であるならば、彼は常にこのすばらしい目的を達成するであろう²⁶⁾という。しかも芸術はそれぞれの民族の生の表現である。

しかしベリンスキーは「われわれには文学がないのだ！」²⁷⁾と叫ぶ。ロシアの国民が無知で教育を嫌う民族だからか。彼は否定して言う、「ロシア民族が決して教育の不倶戴天の敵であったことなどはなく、いつも学ぶ心構えがあったということを感じていただきたい。ただ国民は、自分の学習を哲学からでも、学校からでもなく、ましてアカデミーからでもなく、いろはから始めなければならなかったということだけである。農民のあご髭は星を数えるのを邪魔しない—これはクルスク地方でよく知られている言葉なのです²⁸⁾と。ロシアの後進性のゆえなのであり、そして後進性を克服しようと「偉大な、有益なそして栄光ある多くの事業」を為したにもかかわらずそれを急ぎすぎたピョートル大帝の治世によって生み出された上流社会と国民大衆との間に生じた精神的・文化的断層の結果にほかならないことを認める。²⁹⁾

しかしベリンスキーはロシアの将来を楽観し、スラヴ派的に後進性ゆえの優越性を主張さえしている。「わが国に真の芸術の花咲く時期はいつ訪れるであろうか？ その時期はやがて到来するであろう。そのことを確信せよ！ しかしそのためには、まず第一に強力なロシア民族の特質が表現されるような社会がわが国に形成されることを必要とする。わ

れわれの努力によって建設され、祖国の土壤に成長した啓蒙が存在しなければならない。われわれには文学がない。私はこのことを、歓喜と喜悅の情をもって繰り返す。なぜならば、この真実のうちにわれわれの未来の成果の保証を見るからである。……時来たって、啓蒙がロシアに大流をなして流れ込み、民族の知的特徴が解明されるとき、われわれの芸術家や作家は自己の全製作の上にロシアの精神の刻印を押すであろう。しかし現在われわれに必要なものは勉強！、勉強！、勉強であるのだ！……今ロシアが何よりも必要とするのは、民族全体の教化である。啓蒙の光が社会の隅々まで行き届いたとき、ロシアは輝かしい独自の民族文化をもって人類に寄与するであろう。……今や、未来のための種子が成熟しつつあるのだ！そしてその時われわれは、自己の文学を持つであろう。西洋人の模倣者ではなく、その競争者となるであろう。」³⁰⁾

だがベリンスキーは民族の生の表現としての芸術を求めたが、それは個人の自我がその「民族の自我のなかに消滅してしまう」ものではなく、あくまでも人間、つまり民族から分離し、他とは無関係に自己自身だけの興味ある「個性的存在」の現実の「あるがままの生そのものを求める」ものでなければならないとした。³¹⁾

しかしながら、真に善なるものを追い求めようとするベリンスキーに現実での悪との闘いを否定しないシェリングの哲学は、そのための原理を与えなかった。彼は思想的に苦悩していた。そんな時にバクーニンにフィヒテを紹介され、それにとびついた。かくして彼は内的生活にその活路を見いだそうとする。その成果が『道徳哲学体系の試み アレクセイ・ドロズドフの著作』(1835年)である。

ベリンスキーは「真理」の探究には二つの方法、すなわち「ア・プリオリとア・ポステリ、つまり純粹の理性からと経験から」とがあるが、前者の方法でなければならないとする。「認識は、確實なものであるためには、われわれの認識の源としての理性から発しなければならない。従って主観的でなければならない。なぜならばすべて存在するものは、われわれの認識においてのみ意義を有し、それ自身にとっては存在しないからである。」³²⁾と述べ、自我の内的生活に価値を見いだした。「事実と事象は、それら自体で存在するものではない。それらはすべて、われわれの中に含まれているのでありそしてわれわれの自我の修正なのである。例えばここに赤色の四脚の机がある。赤い色は私の視神経が作り出したものである。……机の意味自体も私の中に存在し、私によって作り出された観念なのである。……事実を思考によって解明しなければならない、思考を事実から導きだしてはならない。換言すれば、事実はわれわれの認識の創作物でなければならず、意識は事実の結果であってはならない。」事実から導きだすと、精神がその奴隷となってしまう。それが18世紀の経験主義であり、その結果として「懐疑主義、唯物論、無信仰、淫乱および広範な知識にもかかわらず無知へと導いた」³³⁾のである、と完全に自我の内的な観念の世界に浸る。

悪も善も人間の意識の問題となる。彼は言う、「悪の起り方は人間自身の中に含まれており、善の起り方もまた同じである。それ故に、両者とも、必然として、彼の意識から生じるのである。もしも人間が、悪を為す能力を有していなかったならば、彼は善を為すことも出来なかったであろうし、自由でもなかったであろう。人間の知性が悪と善を区別す

るのである。しかし人間の意志は両者を選びだすのである³⁴⁾と。人間の意志は理性によって善を選び、神の意志にそわねばならない、なぜなら「神の言葉は人間理性の法則に完全に合致する」からである³⁵⁾。そして善への努力と行為は自覚的な、理性的反省を経たものでなければならない。「あらゆる偉大にしてすぐれたものを心のなかに萌芽的に有してはいるが、この萌芽を自意識によって発展させない人々がいる。それ故に彼は善への瞬間的な突発にのみ終わって、その行為はその他の全生活と矛盾するのである。彼らの行為は無自覚的であり、それ故に何らの品位をも価値をも有しない。なぜならば、その行為は意志の結果ではなくして、彼らの有機体の行為であるからである。」³⁶⁾そして「それ故に、われわれの見解では、『善人』というよりほかは何らの取り柄もない人たちは最も哀れな無価値者である。……勿論かかる『善人』も善人であるに違いない。ただそれはフランス人たちの言う『お人好し bonhomme』という表現の意味でしかない。彼らは忠実な犬と従順な馬にそっくりである」³⁷⁾と単なる善人である人々を嘲笑する。

自覚的で理性的反省は自己完成への努力によって磨かれなければならないのである。「人間は自己完成に努力し、自己の至福を義務と一致させる」ことこそが根本的な「道徳法則」であるとする³⁸⁾。ベリンスキーは「人類の無限の完成に対する楽しい信仰と聖なる確信とは、われわれを自己の個人的完成へと義務づける」、それこそが「この世の生活」を意味あるものとし、「われわれの向上と新生への渴望」を意味あるものにすると³⁹⁾、「自己完成」つまり個人の道徳的人格の完成を説くに到った。

このように「観念的な生活こそが真に現実的な、実際的な、具体的な生活であり、いわゆる現実的生活は否定であり、幻であり、無であり、空虚である」⁴⁰⁾として、観念の世界にその身を置いたが、やがてこの世界も彼には安住の地ではなかった。1837年にバクーニンに「あらゆる生活の配慮、すべての外的生の不安を私は心中で抑えつけようと努力した。そしてどうやらこれに成功したように思われたが、私の心のやすらぎはうわべだけのものでしかなかった。私の心中には恐ろしい闘いが続いていた。……観念の生と現実の生とは、私のなかでいつも分裂していた。」⁴¹⁾とその思想的苦悶を吐露している。彼の苦悶を救ったのはまたしてもバクーニンであった。バクーニンはヘーゲルを紹介し、ベリンスキーはそれにとびついたのである。

III

ベリンスキーはヘーゲルを知ることによって、より正確に言えばヘーゲルの哲学を理解してというよりヘーゲルを自分なりに解釈して、いわゆる「現実との和解」をなしえて、抽象的な理念の世界と具体的な現実との矛盾を少なくとも思想において解決することになる。

ベリンスキーがヘーゲルの哲学に触れるのは1837年半ば頃からといわれるが、その影響の下に最初に書かれたのが『シェークスピアのドラマ ハムレット。ハムレット役のモチャーロフ』(1838年)であるが、その中で次のように書いている。

「これらの演じている人々はみな、自分のために演じながら、全体のなかで演じており、自分のために動き回りながらドラマ全体のために役立っていることを少しも気づかないま

ま、自分の役のまじないの輪の中にあるのである。……観客は、心のなかに調和と平安の感情を持って、生に対する明るい見解を持ちと生と和解しながら、劇場を出ていくのである。その理由は、有限なるものと個人的利益との闘争のなかに、相対的な善と悪でなく、すべては無条件の幸福であるところの、普遍的な、和解の、絶対的な生を見たからである。」⁴²⁾と。

ベリンスキーは現実の中に完全にその身を置く、「私はかつてあれほど私が軽蔑した現実を今や志向し、その合理性を自覚し、そこから何物をも放擲し得ず、そこで何物をも誹謗し、否認し得ないことを覚って、神秘的な喜びに震えている。……現実には、鉄の爪と鉄の顎骨を持って武装された怪物である。それに進んで身を擽げないものは、現実によって強制的に捕らえられ、むさぼり食われる。」(1838年9月10日 バクーニン宛て)⁴³⁾、「現実という語は、私にとって神という語と等しいものとなった」(1839年9月29日—10月8日 スタンケーヴィチ宛て)⁴⁴⁾と現実と和解を語り、専制主義と農奴制のロシアの現実をす理性的現実として受け入れるのである。しかしその現実のなかでも個人の解放を見ようとする。この見解を最もよく表わしているのが『ボロジノ戦概要 (1812年についての回想)』(1839年)、『ア・ペ・ジュコフスキーのボロジノ記念日』(1839年)と『メンツェリ、ゲーテ批判』(1840年)である。『ボロジノ戦概要』を中心に見ていく。

「民族は抽象的な概念ではない。民族は生命ある特性、精神的組織体であり、その多様な生活機能は一つの目的に奉仕する。民族は個々の人間と同様人格的個(リーチノス)である。」⁴⁵⁾とする有機体的な民族観の文章から始まる。ベリンスキーは、どんな人間社会も始めは「種族として、ついで民族として存在」し⁴⁶⁾、その中から「神聖化」され、「宣言」されたり「文書で確認」され、「法律」化されたときのみ「民族は国家となる。国家は人間の社会生活の最高の契機であり、その最高唯一の理性的形態である。国家の一員になることによってのみ、人間は自然の奴隷たることをやめて自然の命令者となる。国家の一員としてのみ、人間は真に理性的な存在となる。」と言う⁴⁷⁾。そして民族性を持たないコスモポリタンについては、「生気の無い薄暗い、幽霊にも似た虚偽的、二義的な不可解な現象」であり、他国で育ったロシア人は「両性動物と同様奇形かつ醜悪で、……カインのごとく地上を彷徨する。」⁴⁸⁾と言い切る。

国家の元首としての皇帝権は絶対神聖なものとなる。「ツァーリはツァーリとして生まれなければならない、そして誕生の権利は彼の最も重要なかつ最も神聖なる権利である。幾百万の人々のうちから彼は神によって選びだされたのであり、幾百万の人々は彼が選ばれたことに嫉妬できずそして自ら進んで彼の前に跪くのである。」と⁴⁹⁾。また『ア・ペ・ジュコフスキーのボロジノ記念日』では、「ツァーリの権力に無条件に服従することは、われわれの利益であり、また必然であるばかりでなく、われわれの生の最高の詩であり、民族性—もし民族性の言葉の下に個々の個人を自分の国家のもつ人格的個と利己主義の全体的意識への一体化の行為の意味に使うとするならば—である。」⁵⁰⁾と述べるのである。

ベリンスキーは、再び「社会あるいは民族は抽象的な概念ではなく、生きた人格的個であり、統一的不可分の身体であり不可分の精神である。それは……神の意志で生み出されたものであり、それは、機械的ではなく、動的に、すなわちその本質を構成するそれ自体

の自主的活動によって、外部からの粘着や融合を通してではなく、種子から樹木が生まれるようにそれ自体から（内在的）に、有機的に発達するのである。⁵¹⁾と有機体的な社会・民族を説明し、この存在しているゆえに理性的な現実の中に個人が和解し、主観や利己主義を棄てることに幸福があるとす。「あらゆる人間は、自己自身を目的とする。生は彼に、満足として、幸福として、喜びとして与えられる。従って人間は、自分の個人的必要、好みそして能力に応じて、それを得んと努力する完全な権利を有する。……人間の主観的な側面は真実であり、従って現実的である。」しかしながら、「一面的な真理は、極端に至るとき誤謬に陥ってしまう。主観的であることは主観的であることにとどまる限り、知識の分野においては認識の極限と恣意に転じ、感情の分野においては空虚な非道徳的利己主義となり、行為の分野においては犯罪と悪行と化する」⁵²⁾のである。さらに続けて言う。「人間は、自己の人格的個に関しては私的な偶然的なものであるが、しかしその個人が表現すべき精神に関しては普遍的で必然的である。ここから彼の状態と志向の二重性が生じる。自分の自我と彼の自我の外に見いだされるものとの間に闘争が彼の非我を形づくる。彼の個人的特性に関しては非我の世界、つまり客観的世界は彼に敵対する世界である。しかし彼の精神に関しては、無限のそして普遍の閃光として、彼の非我の世界、客観的世界は、彼に親和なる世界となる。幻ではなく、現実の人間となるために、普遍者の私的表現、あるいは無限者の有限的現れとならなければならない。その結果として、彼は自分の主観的な人格的個を、それを虚偽でありかつ幻であると認めて、放棄しなければならず、和解的なもの、普遍的なものに、ただ彼の真理そして現実を認めて、和解しなければならない」⁵³⁾、「主観は語る一私は自己自身を目的とし、生のために生き、自己のために生きることが欲する、と。しかし外界は彼にたいして—おまえはおまえ自身のために作られたものではない、おまえは私に従属し、おまえの喜びを、満足もすべておまえは私の許しを得て得ることが出来るのだ、と語る。」⁵⁴⁾、従って、「社会と抗争し、社会と和解しないものは、不幸である。」なぜなら「社会はより高次の現実であり、現実には人間に完全に自己と和解することを、人間の側からの自己の完全な認識を、要求するが、あるいは巨大な手掌の船の重さで人間を圧潰するかのいずれかである」からである。現実との和解は『メンツェリ ゲーテ批判』でも「存在するものはすべて必然的であり、理性的でありかつ現実的である。自然を眺めよ、……自然の無限な多様性のうちに驚くべき統一を見いだせ、その無限の対立のうちに驚くべき調和を見いだせ。」⁵⁵⁾と繰り返される。

このように現実と和解し、保守的な見解にあって、ベリスキーは、ロシアの現実には消極的に、また悲観的には対応していない。むしろこの現実にはロシアの明るい未来を見ようとしている。それはツァーリを善として受け入れ、先導者としてのツァーリへの期待があるからにはほかならない。

彼は和解にいたる直前の1837年8月の書簡で次のように明るい未来を語る。

「もし、ロシアを構成する各人が、愛を通じて完成に到るならば、その時ロシアは一切の政治抜きで、世界で最も幸福な国になるだろう。啓蒙—ここにその幸福への道があるのだ」「ロシアはまだ子供です。それ故にその腕のなかで自分の養い子にたいする完全な愛情に満ちた心臓が鼓動し、その手には腕白を罰するように鞭が握られているような乳母が

必要です。子供に完全な自由を与えることは、彼らを破滅させることを意味します。今日の状態でロシアに憲法を与えることは、ロシアを破滅させることを意味します。わが民族の理解力では自由は無拘束なのです。そして無拘束は無法行為なのです。解放されたロシアの国民は、議会に行かずに、酒場に駆け込み、酒を飲み、窓をたたき割り、そして貴族、つまりあご髭を剃り、百姓の上っ張りではなくフロックコートを着て歩く旦那がた、を首吊りにしてしまいうだろう。……ロシアの全希望は、啓蒙開化にあり、変革にも、革命にも、憲法にもあるのではない。フランスでは二度の革命がありました。そしてそれらの結果としての憲法は何だったのでしょうか？ この憲政のフランスでは専制プロシアにおけるよりもはるかに自由な思想が少ないのです。「市民的自由は、民族を構成している各個人の内的自由の成果であり、内的自由は意識によって獲得されるのである。そしてこのようなすばらしい道によってわれわれのロシアは自由を達成するであろう。……われわれの政府は農奴制に反対して書くことを許してはいない、しかしそのうちに徐々に農民を解放するであろう。われわれのところでは長子相続制がないお陰で、われわれの貴族はひとりだけで、一切の革命も、内部的戦慄もなく、滅びていくだろうことを見よ。そしてわれわれの子供達がわれわれの年代になるころには、彼らは農奴制について、それを歴史的事実として、過去の出来事として、知ることだろう」「教育の普及の結果とて、世論の確立もまた、これにもまして一層、専制権力が可能にしてくれる。この専制権力がわれわれに思ったり、考えたりする完全な自由を与えてくれる。しかし大声で語り合ったり、また権力のこと干渉することは制限する。」「酒はそれを利用することを知っている成人にとっては有益であるが、子供にとっては破滅的となる。政治はロシアにおいて阿片にもなりかねない酒なのだ。」「事態を成り行きに任せよう。そして神聖かつ変わることなくこう信じよう。すべては良い方へ進んでいる。善のみが存在し、悪は消極的観念であって、善のためにのみ存在しているのだと。そして自らは自己に注意を向けよう。善と真理を愛そう、学問の道によってこの二つを志向しよう」「啓蒙の使徒たること—これがわれわれの使命である。だからクリストの使徒たちを真似よう。彼らは徒党を組まなかったし、秘密もまた公然の政治組織も作らなかつた。……つまり学ぶこと、学ぶこと、そしてさらにもっと学ぶことだ！ 政治を悪魔に、学問万歳！」⁵⁶⁾

このような楽天的な見解は、1840年にも持続される。『1840年の暦』では、「1940年のロシア見るように生まれあわせるわたしたちの孫や曾孫が羨ましい。その時ロシアは教育ある世界の先頭に立ち、科学と芸術に法則を与え、啓蒙された人類全体から尊敬という敬虔な贈り物を受け取るのだ。」⁵⁷⁾と大人になったロシアの未来を想像する。

そしてペリンスキーは教育論を『子供の本について』（1840年）で展開する。ここでの教育論はペリンスキーがルソーやフレーベル的な見解を持っていると高く評価されてきたものであるが、「現実との和解の産物」であることを見逃しているきらいがある。ペリンスキーは「現実と和解」して現実のロシアでの望ましい教育を論じ、その可能性を信じようとしているのである。

「教育—それは偉大なる事業である。教育によって人間の運命が決められるのである。」⁵⁸⁾と、教育への限りない思いが込められている。

「理性的教育は、生まれつきの悪人でもその悪を減らし、あるいは善人にしてしまい、きわめて鋭い能力を一定程度まで発達させ、また全く制限されたそして卑しい本性に出来るだけ人間味を与えるのである。」⁶⁰⁾「もしもすべての者にとって、等しい正常な教育が可能となるならば、天性にめぐまれない者たちの数は非常に制限され、その結果として実際に恵まれぬ者たちはアルコールづけのビンに入って陳列室に飾られてしまうほどめずらしくなるだろう。そしてそれ故に教育は、大多数のものにたいして、さらに大なる重要性を持つだろう。それがすべてとなる——生となり死となり、救いとなり破滅となる」⁶⁰⁾と、教育至上主義的である。

彼は自然主義的教育論を展開する。「教育は自然の助力者とならなければならない——それ以上ではないのである。一人一人の間は、悪くなることも良くなることも、ただ自分なりに、個人的に、なることが出来る、個人的な人格的個である、ということのを忘れて、幼児の心はその上に何でも描ける真っ白な板だと普通考えられている。……否、幼児の魂は真っ白な板なのではなくて、種子の状態にある木なのであり、可能性のなかにある人間なのである！……園丁は個々の植物の個別の本性ばかりでなく、季節、天候、土壌の質を考慮する。各々の植物はそれぞれの成長の時期を持っており、園丁はそれに合わせて植物と自分の行動を按配する。彼はまだ幹になっていない茎にも、すでに枯れて死にかかっている古い樹木にも接木はしないであろう。人間はそれぞれの成長の時期を持っている。これを考慮しなければ彼のうちにあらゆる発達を押し殺してしまうかもしれない。」⁶¹⁾

そして「教育の一つの面も見落とすな、子供に身だしなみについて、清潔さについて、マナーや他人との対応の気高さや品位についても語りなさい。しかしこのすべてを普遍的かつ高度な源泉から得させるようにしなさい——社会的身分あるいは階層の特権的な要求からではなく、人間的価値から、得させるようにしなさい。……人類の名にたいする尊敬、彼が人間であるということだけの理由での人間にたいする無限の愛情、自分の人格的個にも民族、信仰もしくは身分、さらにその個人的資質のあるなし、に一切関係なく人間への限りない愛情、要するにその成員のうちで最も遅れている人間のなかにさえもある人類への無限の愛情と限りなき尊敬は自然現象であり、大気であり、人間の生命とならなければならない。」⁶²⁾と、現実との和解の中であってひたすら人類愛を説くのである。

IV

ペリスキーの現実との和解を長くは続かなかつた。彼はヒューマニストであつて、その意味で理想主義的ではあつたが、空想主義者ではなく、観念の世界に安住できなかつた。彼は常に現実の中に生きようともがいていた。そうであればあるほど現実のロシアとの和解は矛盾を増し、彼の苦悩を大きくしていった。1840年3月にはすでに苦悩が深まり、ポトキンに「まったく悲劇的な状態だ！ われわれの心が……至る所に傷だらけだからだ。……どうしたらよいのか？ 全体のために個人が破滅することは、和解の法則だ。……しかしわれわれは現実と和解できない。現実がわれわれを憎悪し、軽蔑するように、われわれも現実を憎悪し、軽蔑する。どこに憩いがあるというのか？」⁶³⁾と書き送っている。スタンケーヴィチの夭逝もまた彼をいっそう悩ませた。「私に、生は生の労苦に値す

るにはあまりにも空しいものだと思われる。しかもみな生き、苦しみ、愛し、求めているのだ。スタンケーヴィチは死んだ。そして死後に何が残ったであろうか？ 蛆虫のわいた屍のみだ⁶⁴⁾と、生きることの空しさを書いたが、この死は同時に個としての人間の生き方についての問いかけでもあった。

この年の10月になると、「人間の人格的個は、歴史よりも、社会よりも、人類よりも、より高い」⁶⁵⁾と言い切り、12月には個人の自由のために、ロシアの現実の否定を宣言する。

「私がボルジノ戦に関する……論文のなかで展開しようと努めたイデーは、たしかにその基礎においては正しい。しかしそれに劣らず神聖な歴史的権利としての否定のイデーをも展開すべきであった。それなくしては人類史が停滞して悪臭を放つ泥沼と化してしまおう」「存在するものは理性的である。しかし鞭は至る所に存在している。鞭の存在は、それ故に理性的、現実的である。だがその存在は、それにもかかわらず、陰鬱であり、憎悪である。」として、「厭うべきロシアとの現実」、つまり「物質的動物的生活、出世欲、勲章欲、金銭欲、賄賂、無宗教、放蕩、あらゆる精神的関心の欠如、厚顔無知な愚行、凡庸、無能の勝利のシナの王国」を否定して⁶⁶⁾、「今後私にとって自由主義者（リベラル）と人間とは同一である。専制主義者と鞭刑者とは同一である。自由主義のイデーは最高度に理性的であり、キリスト教的である。蓋し、その課題は人格的個たる人間の権利を回復し、人間的尊厳を復活したからであり、しかも救い主自身も地上に降り来たって人格的個たる人間のために十字架の上で苦しまれたからである」と、人格的個たる人間の自由を擁護するためにその身を捧げることを宣言する。そして1841年3月には「主体、個人、人格的個の運命は、全世界の運命とシナ皇帝（すなわちヘーゲルの *Allgemeinheit* 普遍性）の健全な状態よりもはるかに重要である」⁶⁷⁾とヘーゲルとの訣別を告げる。そして「私のうちには、なにかこう、粗暴な悪鬼にでもとりつかれたような狂気じみた、人間的人格的個の自由と独立に対する愛情がわきあがってきた。そしてこの人間的人格的個の自由と独立は、正義と勇敢さに基づいた社会でのみ可能なのだ。……人間的人格的個は、私には自分が狂気になるかと思うほどの問題となった。私はマラー式に人類を愛しはじめている。つまり人類の極小の部分にある者たちのために私は火と剣とを持って残りの部分の者を根絶するだろう。……ヘーゲルは国家の理想として立憲君主制を空想した。何という狭溢な考えであろう。否、君主は在るべきではない。なぜなら君主は同胞ではないからである。……人間は同胞でなければならない。……人間は互いに侮辱し合うべきではない。」⁶⁸⁾、さらに「ああ友よ、社会なくしては友情も、愛も、精神的関心もありえない。」⁶⁹⁾「社会性、社会性—あるいは死！ これこそ私の座右銘だ。人格的個が苦しんでいるとき、全体が生きていることは、私にとって何であろうか？ 大衆が汚辱のなかに浸るとき、天才がこの世で天上界に住まうということは、私にとって何であろうか？ 私がイデーを理解し、芸術、宗教、歴史におけるイデーが私の前に開かれていることは、人類としての私の兄弟たり、キリストにおいて私の隣人たるすべての者とこれらを分かち合えない時には、私にとって何であろうか？ ……私の幸福が幾千万人のなかで私ひとりに与えられたものならば、そのような幸福は立ち去れ！ 私は幸福を欲しない。もし私のそれが私より

小さな兄弟たちと共通なものならば！ 大衆とその代表者たちを見るとき、私の心臓はうっけつし、けいれんしたように引きつるのだ。」と叫び、かくしてペリンスキーは「新しい極端」たる「社会主義の理念」に達するのである⁷⁰⁾。

ペリンスキーにとって社会主義の理念は「歴史をも宗教をも併合した。そのゆえに私はこれによって私の生、君の生、私が生の道で出会うすべての人の生を解明する」⁷¹⁾ものであって、彼は「信仰の形で人間の自由意志を拘束するいかなる本質的原理にも断固として反対する」⁷²⁾、「富者もなく、貧者もなく、皇帝も臣民もなく、兄弟があって、人々があって、使徒パウロの言葉によればキリストはその権力を父に与え、父なる理性が新たに支配するであろう。」⁷³⁾、つまり彼は人間の個人の自由を実現するものとして社会主義の理念に思いを馳せたのであった。

その後のペリンスキーは、人間の自由と尊厳について論究し、その実現を求めていったといえる。

『民族詩の一般的理念』(1841)では、「イデーは、観念的な可能性の領域から実証的な現実に移行するために、自己の普遍性の否定を経過して、特殊的、個別的、人格的個的とならなければならない。……人間にとって、普遍性が人々に相互に結合するより以上、相互的な普遍的なものであることは争いえないであろう。だが……人間のうちには他のものより高い、最も気高くかつ尊厳的な普遍的なものがある。これは——愛である。……それぞれの人間は自己目的であり、……各人の使命は自己のうちにある人間的なものすべて、普遍的なものを発達させそしてそれを楽しむことである」⁷⁴⁾と。

『プーシキン論 第四論文』(1843)では、「全体は部分よりも高い、無条件的に個人よりも高いし、理性は人格的個よりも高い。これは疑いの無い真実である。しかし全体は部分のうちに、……理性は人格的個の中に表現されるのであり、部分と人格的個がなくしては全体や……理性的なものは単なる観念的可能性にすぎず、生きた現実ではないのである」と⁷⁵⁾。

『1846年のロシア文学観』(1847)では、「今やわれわれは、ヨーロッパ的なものがアジア的でないという理由でのみヨーロッパ的なものに歓喜するのを止め、それが人間であるというゆえんでのみそれを尊敬し、それへと希求し、この基礎のうえに人間的なものを含めないすべてのヨーロッパ的なものは、人間的なものを含まないすべてのアジア的なものを拒否するのと同様な精力を持ってこれを拒否すべき時である」⁷⁶⁾「人間の人格的個は、他の人々の人格的個の除外であり、まさにそのことによって人間の本質の制限である。いかなる人間といえども、彼の天才性がいかに大きいにしても、人生のあらゆる範囲はおろか、人生のある一つの方向をさえ自分一人で汲み尽くすものではない。一人の人間といえども、自分をもってすべての人のかわりとなること、つまり彼らの存在を不必要とすることができないのみならず、また一人の人間のかわりとなることさえできない。その人間がいかに彼よりも道徳的および知的関係において低いにしてそうである。しかし万人および各人は、万人および各人にとって必要である。このことにこそ、人類の統一と友愛が基礎づけられるのである。人間が力を持ち、保証されているのは社会においてのみである」と⁷⁷⁾。

ペリンスキーは、「分析と究明の精神は、現代の精神である。……現代は何物をも無条

件に受け入れることなく、権威を信ぜず、伝承を拒否するのです』⁷⁸⁾と、批判者としてロシアの現実を暴き、またインテリゲンツィアの役割を担うべき文学者たちを厳しく批判していく。例えば、風刺家たちにたいして、「社会は現実的なものであり、想像的な何かではない、そしてそれ故にその本質は、一つコスチュームや髪型を作り出すのではなく、気質、習慣、理解、関係、等を作り出す。社会に住んでいる人間は、思考の形態や自分の行動の形態をそこに依存している。自分の風刺のドンキホーテ的振る舞いの土台に、彼らは社会道徳性に依っている彼らの風刺が、この道徳性に非常に矛盾していることを人がよさそうに疑うことなく社会道徳性を置いている。……子供の耳には、愛や、名誉や、自己犠牲や、真理といった言葉ではなしに、取った、貰った、手に入れた、だました、といった言葉が鳴り響く。……これらの善良な風刺家たちは、人間をその教育、社会への彼の関係、に注意を払うことなく、取り上げ、そして想像力で作り上げたこの人形を暇なときに揺り動かしているのだ』⁷⁹⁾と批判し、またゴゴリに対しても痛烈な非難を浴びせたことは周知の通りである。

しかしながらベリンスキーは、現実のロシアを非難しまた否定しても、ロシアの後進性の優位を説き農民を理想化することはない、ロシアの現状をそのまま認める。

「ヨーロッパにとっての1年は、アジアにとっては1世紀であり、ヨーロッパにとっての1世紀はアジアにとっては永遠です。すべて偉大なもの、高尚なもの精神的なものはヨーロッパの地盤で生まれ、成長し、華麗な花を咲かせ、すばらしい実りをもたらした。」⁸⁰⁾というとき、ヨーロッパに拝跪せよというのではなく、ロシアの後進性を率直に認め、いずれヨーロッパに追いつかねばならぬことを説く。また「一瞬なりとも次のことを忘れるべきではない。すなわち芸術と文学の主人公は、人間であって、旦那でも、いわんや百姓でもないのである。シェークスピアがそのドラマのなかに一様にあらゆる人々を登場させたのは、彼がそれらの人物のうち人間を見たからであって、決して庶民への偏愛のためではない。百姓が百姓であるという理由をもって、また百姓が粗野で、きたなく無知であるという理由をもって、社会の教育ある階層よりも偏愛するということは奇妙な嘲笑すべき誤謬である。」⁸¹⁾と農民の状態をありのままに見つめよという。

またベリンスキーは歴史の発展段階を飛び越えることは出来ないとし、工業の発達ブルジョアジーの到来について語る。「ブルジョアジーが悪であり、除去すべきであり、彼らさえなくなれば全ては良くなるだろうということを自明の理として確認する人たちに、私は属さない。……中産階級なしに幸福であるような国家をこの目を見たときにはじめて、私はそういう意見に同志しよう。今はただ、中産階級なき国家は永久に微小に運命づけられていることを知るのみである。経験によってのみ解決され得るような問題のア・プリオリな解決に、私は興味を持たないのだ。」⁸²⁾、そして「ブルジョアジーは偶然の現象ではなく、歴史によって招来されたものであり、それは草が生えるように昨日現われたものではなく、最後にそれは自己の偉大なる過去、自己の輝かしい歴史を持ち、人類に偉大な貢献を為したことを私は理解している。」⁸³⁾と言う。

しかしながら同時また資本家の専横と労働者の不幸についても認識し、そこに人間の自由と尊厳を見いださない。

「フランスのプロレタリアートは法の前で最も富裕な所有者かつ資本家とも平等である。両者とも同一の法廷で、罪に関しても同一の刑罰で罰せられる。しかしこの平等にもかかわらず、プロレタリアートは少しも楽になっていないことに、不幸がある。所有者かつ資本家の永遠の使用人、つまりプロレタリアートは全てその手中にあり、全てその奴隷である。何となれば、資本家は彼に仕事を与えそして専横的にその賃金を決定しているからだ。……すばらしき平等よ！」、そして「資本家たちの手中にある国家は役に立たないと認めましたが、今私は付け加えます。資本家たちの手中にある国家は不幸であると。この人たちには愛国心がなく、感情のなかのあらゆる気高さが欠けています。彼らにとっては戦争か平和かの問題は株券の騰貴か暴落を意味するだけなのです。——そのこと以上のことを彼らは何も見ないのです。」⁸⁴⁾と、資本家たちのなかに非人間性を見るのである。

それでもベリスキーは、ロシアでの資本家をピョートル的皇帝によって貴族から作り出すことを期待して言う。「私が信仰深い友人のいるところで、私がロシアに今や新しいピョートル大帝が必要である、と述べたとき、彼は私の考えを攻撃し、人民自身が全てを自分自身で為さねばならないと語った。何というナイーブな甘い考えであろう！ かような考えからすれば、ロシアの森林に住まう狼たちが立派な国家に結合し、まず絶対王政、ついで立憲王国を設立し、最後に共和制へ移行すると想像することだって可能なのだ。……信心深い友人は、神がロシアをブルジョアジーから救うであろうと論断した。しかし今やロシアにおける市民的発達の内的過程が、他ならぬロシアの貴族がブルジョアジーに転化するときから始まることは明らかなのだ。ポーランドは、権利を持つブルジョアジーを欠如する国家がどれほどの強さを持つものかを最もよく証明したのである。」⁸⁵⁾と言うが、しかしベリスキーもはや皇帝に幻想を抱くことはない。それは不可能なことであることを重々承知していた。

彼は、革命家ではなかったので、現実的には子供の教育と国民大衆の啓蒙に期待せざるをえなかった。

「教育が発達した結果、……光が闇のうちから理性が偏見に克打ち、自由な意識が人間を精神的な兄弟にするであろう——そうすれば、新しい地と新しい天が出現することになるだろう」⁸⁶⁾「初等の第一段階の学習は、全生涯を左右してしまうといえるほど、人間にとって重要なものである。学習に良きしっかりした基礎づけを行なうことは、真の根本的な学識への裏付けとなる。学習の魂をなすものは、叙述の体系であり、科学性である。最も有害な学習は—それは遊戯や楽しみを用いる学習、単純な成り行きまかせの学習である。それ故に悪くなるのである。しかし幼年期において体系的にまた科学的に学んだ人間は、いかなる独学者より幸せである。何となれば、彼は知っており——それもしっかりと知っているからである。しかも大切なことはいつも自分自身で学ぶことがき、また彼の学習して獲得したものはその広さ・深さ・強固さで、この際多面性についてはさて置き、際立っているからである。」⁸⁷⁾と体系的かつ科学的な学習でしっかり基礎づけすることの重要性を説く。そして「社会的な啓蒙と教化は、わが国では細いやっと目につく流れとなって動きだした。しかしそうではあっても、これは最も気高くかつ最も価値ある源泉——科学と文学そのものから、発している。科学はわが国にあってはたった今根付いたばかりで

あって、まだ根をはっていない。一方教育今はまだ成長してはいないが、すでに根をはっている。その葉は細く薄く幹は高くもなければ太くもないが、根はいかなる嵐、いかなる流れ、いかなる力も引き抜けないほど深い。この森のある場所を刈り倒してしまってみよ、その根は別の場所に若枝を出すだろう。そしてそれが新しい若枝を出し繁茂するのに疲れ果てる前に、諸君が刈り倒すのに疲れ果ててしまうであろう。われわれの社会の教育の進歩について語りながら、われわれの教育は、社会の理解力と気質の上に立つわれわれの文学の直接的影響であるので、われわれの文学の進歩についても語っているのである。われわれの文学はわれわれの社会の気質を作り出し、お互い全く異なっているいくつかの世代を教育してきたし、階層の内面的親交・類似の基礎を置き、一種の社会的見解を形成し、また社会における特殊な階級の類を生み出した。この階級は、通常の中産階級とは、商人と町人との階級からだけ成るのではなく、教育——われわれのところでは文学への愛に向けられる——を通してお互いの親交を持っている全ての階層の人々から成っているという点で異なっているのである。」⁸⁹⁾とロシアの未来に期待をふくらますのである。

以上論じてきたように、ペリンスキーは、ロシアの典型的なインテリゲンツィアであったが、その生涯を人間の自由と尊厳への道をひたすら真剣に追い求め続けたヒューマニストにみちた革命的民主主義者であった。

註

- 1) 岩間 敏：ロシアのインテリゲンツィア，世界の歴史14，筑摩書房，1961，p. 122
- 2) 同上 p. 138-139
- 3) В. И. Ленин Полное собрание сочинений, т. 6, стр. 25
- 4) 前掲書，ロシアのインテリゲンツィア，p. 132
- 5) В. Г. Белинский Собрание сочинений в 9-хт. т. 8 стр. 282
- 6) Там же т. 9 стр. 479
- 7) Там же т. 1 стр. 337
- 8) Там же т. 2 стр. 115
- 9) Г. В. Плеханов Избранные Философские произведения том 4 стр. 452
- 10) Там же В. Г. Белинский Полное...т. 9 стр. 403
- 11) Там же стр. 468
- 12) Там же стр. 714
- 13) Там же т. 6 стр. 328-329
- 14) 小沢政雄訳：ペリンスキー教育論，世界教育学選集89，革命的民主主義教育論1，明治図書，1978，p. 24-27
- 15) 藤井一行：ペリンスキーの大学時代（その生活と思想），スラヴ文化研究I，1958，p. 62
- 16) Там же В. Г. Белинский Полное...т. 1 стр. 532
- 17) Там же стр. 566
- 18) Там же стр. 603
- 19) Там же стр. 608
- 20) Там же стр. 531-532
- 21) Там же
- 22) Там же стр. 578
- 23) Там же стр. 56-57
- 24) Там же стр. 57
- 25) Там же стр. 58

- 26) Там же стр. 60-61
- 27) Там же стр. 51
- 28) Там же стр. 65
- 29) Там же
- 30) Там же стр. 124-126
- 31) Там же стр. 142-146
- 32) Там же стр. 313-314
- 33) Там же стр. 314-315
- 34) Там же стр. 326
- 35) Там же стр. 327
- 36) Там же стр. 330
- 37) Там же стр. 331
- 38) Там же стр. 336
- 39) Там же стр. 337
- 40) Там же т. 9 стр. 78
- 41) Там же стр. 77-78
- 42) Там же т. 2 стр. 51
- 43) Там же т. 9 стр. 166-169
- 44) Там же стр. 262
- 45) Там же т. 2 стр. 119
- 46) Там же стр. 123
- 47) Там же стр. 124
- 48) Там же стр. 125
- 49) Там же стр. 130
- 50) Там же стр. 115
- 51) Там же стр. 130
- 52) Там же стр. 132
- 53) Там же стр. 133
- 54) Там же стр. 134
- 55) Там же стр. 176
- 56) Там же т. 9 стр. 51-56
- 57) Там же т. 2 стр. 515
- 58) Там же т. 3 стр. 49
- 59) Там же стр. 50
- 60) Там же стр. 52
- 61) Там же стр. 52-53
- 62) Там же стр. 64-65
- 63) Там же т. 9 стр. 381
- 64) Там же стр. 393
- 65) Там же стр. 403
- 66) Там же стр. 421-422
- 67) Там же стр. 443
- 68) Там же стр. 468-469
- 69) Там же стр. 465
- 70) Там же стр. 482
- 71) Там же стр. 479
- 72) Там же стр. 479
- 73) Там же стр. 484

- 74) Там же т. 6 стр. 147-149
- 75) Там же стр. 253-254
- 76) Там же т. 8 стр. 194
- 77) Там же стр. 202
- 78) Там же т. 5 стр. 63
- 79) Там же т. 7 стр. 61
- 80) Там же т. 4 стр. 20
- 81) Там же стр. 138-139
- 82) Там же т. 9 стр. 701
- 83) Там же стр. 687
- 84) Там же т. 7 стр. 63
- 85) Там же т. 9 стр. 698
- 86) Там же стр. 714
- 87) Там же т. 4 стр. 396
- 88) Там же т. 8 стр. 36

なお次の各論文を参考にさせていただいた。

- 金子幸彦 ベリンスキーにおける国民性の概念, 一ツ橋論叢 第37巻第6号, 1957, p. 49-67
- 藤井一行 ベリンスキーの大学時代(その生活と思想), スラヴ文学研究1, 1958, p. 57-84
- 藤井一行 プレハーノフのベリンスキー研究, 歴史学研究 No. 220, 1958, p. 29-33
- 今井義夫 ロシアにおける「市民的自由」の問題—ベリンスキーの「ヨーロッパ主義をめぐって」
歴史学研究 No. 258, 1961, p. 33-41
- 藤井一行 ベリンスキーの「国民性」論, 一ツ橋論叢 第45巻第3号, 1961, p. 292-299
- 藤井一行 ベリンスキーとヘーゲル美学(1), 一ツ橋論叢 第58巻第2号, 1967, p. 57-62
- 岡沢秀雄 ベリンスキー—批評の批評— 早稲田大学院文学研究紀要13, 1967, p. 61-77
- 黒沢岑夫 ベリンスキーの“現実との和解”について, ロシヤ語ロシヤ文学研究 第3号, 1971,
p. 19-36